

「出身教会」

主任司祭 晴佐久昌英

先月、カトリック小平教会創立50周年記念ミサに「小平教会出身司祭」として招かれ、共同司式をした。岡田大司教司式のもと、歴代の主任司祭や近隣の教会、修道会の司祭がずらりと顔を揃え、盛大な記念ミサとなった。

「出身司祭」というのは、その教会出身の司祭ということで、司祭からすると、その教会が「出身教会」ということになる。一般には、その司祭が神学校に入学する時点で所属していた小教区が出身教会となる。神学校受験にあたってはその小教区の主任司祭の推薦状が必要であり、ある意味でこの推薦を受けるのが受験の第一関門ということにもなる。

ぼくの推薦司祭は、当時の主任司祭で今は亡き小林五郎神父だった。ある朝ミサに与った後司祭館に行き、神学校を受験したいと告げると、まあ上がりなさいとぼくをソファーに座らせ、コーヒーを出し、開口一番こう言った。

「これからは、君とぼくは、仲間だ。」

以降、小平教会はぼくの出身教会となり、助祭叙階式も初ミサも、小平教会で行われた。

もっとも、ぼくにとっての小平教会は、単に「入学する時点で所属していた小教区」ではない。ぼくの信仰を育て、召命を育てた母なる教会でもある。多感な青少年時代、ぼくはそこで主日ごとにミサに与り、仲間たちと好きなだけ遊んで学んで、悩んで祈って、傷ついて癒されて、つまり、あらゆる教会体験をしたのだ。

最近、「高円寺教会出身」神学生を見ていて、改めて出身教会のありがたさを思う。現実の一つの小教区があり、一人の信徒がそこに所属していることの尊さを思う。それは、神の恩寵が教会という現実のうちに働いていることの、非常に基本的な目に見えるしるしなのである。

受洗者にとっても、「洗礼を受けて所属した教会」は、言うなれば「出身教会」である。どこへ転籍しようとも、それは生涯変わらない。

今年の新受洗者に、神は高円寺教会を出身教会として与えてくださった。それは永遠なることである。今後何があるうとも、この与えられた原点を信じて、「私の出身教会は、高円寺教会だ」という誇りを持ち続けてほしい。